軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 37

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

馬の発育の調査から
―体重・体高とボディコンディションスコア―

マンスリーレポートの31からこの37まで、馬の発育の調査結果を紹介してきました。読んで頂いている方の中には気になっていた方もいたかと思いますが、毎月毎月「大きく育てる」とか「体重の変化は」と言った、太らせることばかり話しているな、と思ったことでしょう。

こちらに寄せられる情報は、その馬の毎月の体重・体高と、肉付き状態を示す数値、すなわちボディコンディションスコア(BCS)でした。延べ２万件の計測値が集まり、体重の値はほぼ全件で報告がありましたが､体高はその半分の約１万件、BCSはほんの704件しかありませんでした。

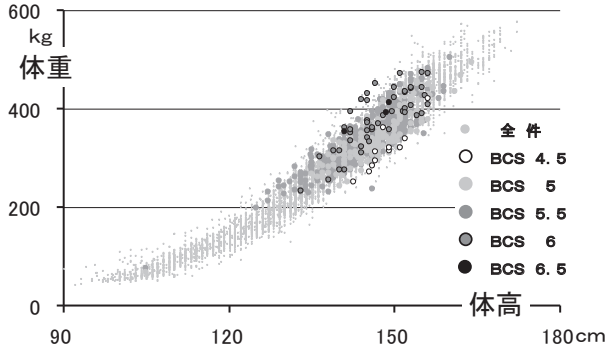
実際に測定している牧場の人に聞くと、体重は意外と楽に測れるが、体高はきちんと立たなかったり、動き回ったりで、難しいとのことでした。BCSはさらに問題が多く、人によって尺度が違うようでした。

しかしキリンのように背丈だけが伸びてしまった馬、逆に小さいのに体重だけは多く、肥満と言うべきなのか、太い体型なのか、数値だけでは分からない馬もいます。そこで必要となったのがBCSです。

BCSとしてよく使われるのが、Dr. R. Hennekeらが提示した５を中心に１から９までの数値で表す方法です。「２：非常に痩せている」とか「６：少し肉付きがよい」といった、馬全体の状態を表現したものですが、肩や背中、尻の肉付き、肋骨間の脂肪の付き方、腰骨や座骨の出っ張り具合などから、その馬の肉付きの状態を総合的に評価するものです。(表―１)

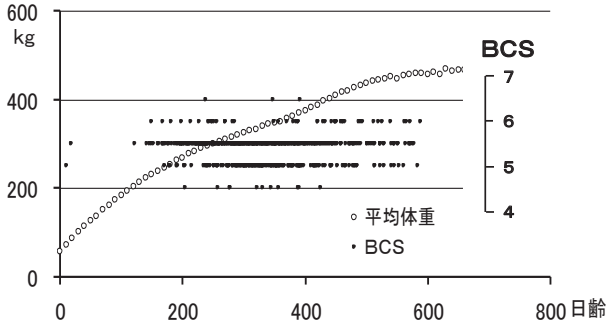
図―１は、日齢には関係なく横軸には体高を、縦軸には体重を示した図です。またBCSが分かっている例では、大きな点で、分けて示しました。同じ体高でも、体重には差があるようです。体高のわりには体重のあるという馬は、BCSが高いと言うことになりますが、大きな点で示したBCSでは矛盾する例も多少ありました。

図－１　体重・体高とBCSの関係



図―２は、日齢を追って示した体重の変化にBCSも示した図です。BCSの変化については、日齢による一定の傾向はありませんでした。全体を通してはBCS5.5が65％、BCS５が25％で、平均は5.4でした。

図－２　体重の変化とBCSの関係



仔馬のBCSは、５から5.5の間で推移するのが理想的と言われています。つまり、BCSを基に飼養管理をしていれば、馬は自然と成長し、その馬のその時期に相応しい体重や体高になるのでしょう。仔馬の発育を体重計や側尺計の無い牧場も、BCSのチェックや記録は是非実施するようお勧めします。

表－１　ボディコンディションスコア

１．削痩　（詳細省略）
２．非常にやせている　（詳細省略）
３．やせている　（詳細省略）
４．少しやせている
　背に沿って脊椎の突起が触知できる。肋骨がかすかに識別できる。尾根の周囲には脂肪が触知できる。股関節結節は見分けられない。
５．普通
　背中央は平らで、肋骨は見分けられないが触れると簡単にわかる。尾根周囲の脂肪はスポンジ状。き甲周囲は丸みを帯びるようにみえる。肩はなめらかに馬体に移行する。
６．少し肉付きがよい
　背中央にわずかな凹みがある。肋骨の上の脂肪はスポンジ状。尾根周囲の脂肪は柔軟。き甲の両側、肩周辺や頸筋に脂肪が蓄積し始める。
７．肉付きがよい
　背中央は凹む。個々の肋骨は触知できるが、肋骨脂肪で占められている。尾根周囲の脂肪は柔軟。き甲周囲、肩後方部や頸筋に脂肪が蓄積する。
８．肥満　（詳細省略）
９．極度の肥満　（詳細省略）

軽種馬飼養標準(2004年)
日本中央競馬会　競走馬総合研究所　編

７回にわたり、仔馬の発育に関する情報を紹介してきましたが、現在もデータは寄せられています。今後はBCSも加わったデータを増やし、さらにはその馬の運動、飼養の方法、母馬の状態、そしてDODなど異常の発症などの情報も集まれば、より詳細な役に立つ分析結果を紹介することができると思います。